

特集・情報化社会と市民④

電子情報ネットワークと市民

額田順二

はじめに

情報化の進展は決して市民生活と無縁ではない。市民生活にとっての外的環境条件の変化として影響を与えるばかりでなく、内発的な目的を満たす手段の選択幅をも与えていると考えられる。にもかかわらず、情報化の進展に関して受け身で考えがちな市民が多いというのが実情ではないだろうか。

現在、主体的かつ積極的に社会の情報化を活用しようとするとき、電子情報ネットワークの有用性が際だってくる。本稿では電子情報ネットワーク全般について、その概要、特徴、長所、短所を概観した上で、電子情報ネットワークに

おける市民の取り組みの一例を示すことにする。

一——電子情報ネットワークとは？

本稿で名付けた「電子情報ネットワーク」という言葉には同義語が数多く存在する。電子ネットワーク、パソコン通信、ワープロ通信、パソコン・ワープロ通信、ネットワーク通信などは全て同じものと考えてよい。各々の同義語はその言葉を使用するものの立場によって使い分けられているようであるが、本稿では「電子情報ネットワーク」に統一する。

電子情報ネットワークでは、ネットワーク参加者（利用者）が自分のパソコンやワープロを、

はじめに

- 一——電子情報ネットワークとは？
- 二——ネットワークのいろいろ
- 三——メリットと問題点
- 四——市民の取り組みの事例
- 五——まとめ

モデム（あるいは音響カプラ^音）を介して電話回線とつなぎ、電話回線を通じホスト・コンピュータとやり取りする。

このやり取りをするためにはワープロやパソコン側にソフトウェアが必要である。一般に「通信ソフト」と呼ばれている。最近のワープロ専用機には通信ソフトが内蔵されたものが多くなってきているが、ほとんどのパソコンでは別途入手する必要がある。

電子情報ネットワークにおける各種のサービスは、ホスト・コンピュータの機能として用意されている。各種機能を含めてこのホスト・コンピュータのことを、単にホスト局とかネットワークと呼ぶことも多い。物理的な設備や施設

に着目する場合はホスト局、そこで行われている活動を着目する場合はネットワークと呼ぶことが多いようである。

やり取りする情報の中心は文字情報である。文字を使った情報には、文章だけではなく、文字を並べて作った疑似グラフィックも存在する。

図形や画像といったグラフィック情報は普通、直接やり取りするのではなく、情報を圧縮し文字情報化するなどして、一旦利用者のパソコンに転送してから、利用者のパソコンの圧縮解除プログラムと表示用プログラムでもとの図形や画像を表示させる。

コンピュータ・ウイルスで有名になった感のあるコンピュータ・プログラムのやり取りもグラフィック情報の場合と同様、直接やり取りするのではなく、情報を圧縮し文字情報化するなどして、一旦利用者のコンピュータに転送してから、利用者のコンピュータの圧縮解除プログラムでコンピュータ・プログラムに戻して利用する。

二——ネットワークのいろいろ

ネットワークは日本全国で数千あるといわれており、それぞれがいろいろな特徴を持っている。各ネットワークを整理する軸として、規模、

機能、空間的スケール、話題の四つを取り上げ各々のバラエティーを紹介する。これらの四つの軸のどこに位置するかでそのネットワークの特徴が変わってくる。

① 規模いろいろ

ネットワークの規模には非常に大きな幅がある。会員数でみると、十万人規模のものから、数人程度のもので、開きがある。

企業として運営されているネットワークを商用ネットワークと呼ぶが、十万人規模の会員数を誇るのはこの範疇に入るネットワークである。非営利団体や個人が運営する中小規模のものをまとめて草の根ネットワークと呼ぶが、会員数は数十人から数百人の規模である。さらに、全くプライベートな目的であり存在を広報していないようなプライベート・ネットワークも存在し、数人程度の会員で運用されているようである。

このように会員数で規模をみると、運営形態に大きく依存して違いが現れているといえる。なかでも草の根ネットワークの範疇では、取り上げる話題に特徴を持たせ、個性をアピールしているネットワークが多い。それだけにまとめてとらえるには無理があるが、まちづくりに着目したネットワークもあり、自治体も関心

を深めている運営形態と言えよう。

② 機能いろいろ

電子情報ネットワークで提供されている機能には大別して次の三つがある。第一はコミュニケーション、第二はインフォメーション、第三はトランザクション^注である。

コミュニケーション機能には、電子掲示板(BBS Bulletin Board System)、電子会議、SIG (Special Interest Group)、電子メール、チケット、CUG (Closed User Group) などがある。

電子掲示板はホスト・コンピュータの中に掲示板を作ったものである。掲示板の名の通り、広報が目的である。掲示はネットワークの運営者、特定利用者、一般利用者という概ね三つのレベルに応じて掲示権の有無が決められている。運営者↓一般利用者、特定利用者↓一般利用者、一般利用者↓一般利用者、の三種程度には分類できよう。この掲示板は細かい目的や内容別に作られる。

電子会議は、即時的反応のある「投書欄」と言うことができよう。電子掲示板のように一方的に情報を流すことを目的としたのではなく、利用者相互の情報のやり取りをもとに「会議」を進めていくものである。会議という名が付い

ているものの一般に堅苦しいものではない。電子会議もその目的・話題別に「会議場」が設定される。電子掲示板と異なるのは議長役が定められる点である。議長役は話題の方向性を決めるなど、進行をリードするが、電子会議は一般利用者の参加によって成り立っており、参加者が多く、「投書」すなわちメッセージの多い会議は活発なものとなる。

SIGは、関心の対象を中心に電子掲示板や電子会議をまとめたものである。例えば「食べ物SIG」には共通の電子掲示板と、「材料」、「日本料理」、「中華料理」、「西洋料理」の各々についての電子会議があるといった具合である。

電子メールはホスト・コンピュータの中に作った「私書箱」である。ネットワークでは手紙を書いたら、この「私書箱」に手紙を入れることになる。一般の私書箱と同様に、この手紙は宛先が「私書箱」の場所まで行ってこれを開けない限り、宛先の手元には届かない。ここがごくごく一般の個人宛の手紙と違う点である。最近、電子メールをFAXに送る機能を備えたネットワークが増えてきており、電子メール利用の可能性を広げている。

チャットは同じ時刻にホスト・コンピュータに接続しているもの同士が文字によって「会話」

できるようにするものである。利用者の文字入力速度が速くないと沈黙の多い「会話」になる。実際にチャットしてみると一種独特な感激を味わうことができるが、一対一の場合、電話でのおしゃべりよりもコストのかかる会話であり、まとまった情報を伝えるにはチャット以外の方法が有効ではある。

CUGは、ネットワークの中にさらにネットワークに近いものを作り、利用できるメンバーを限定したものである。参加可能メンバーは、特定の会社の社員とかいろいろな電子会議の議長役というように、社員間連絡調整とか電子会議運営上の問題点議論というようなCUGの目的に応じて決められる。

インフォメーション機能には、プロフィール、ニュース、データベースなどがある。

プロフィールとはネットワーク利用者の自己紹介文を集め、それを他の利用者の要求に応じて紹介するものである。電子掲示板や電子会議に書き込まれた文章を書いたのはどんな人なのかを確かめるために有効である。

ニュースは新聞社や通信社からのニュースを直接提供するものであり、早期の情報入手を可能にする。

データベースは、新聞記事、雑誌記事、企業情報、人材情報など膨大なデータの中から必要

な情報を検索できるようにしたものである。データベースの利用にあたっては普通、別途料金を支払わなければならない。数カ月も前に新聞の切り抜きを忘れ、その情報がどうしても早く知りたいというような場合とか、自分の見落とした情報も含めて関心のある記事を調べあげたいというような場合威力を発揮する機能である。ただし現在のところ、下手に自分で検索するよりも、検索のプロである「サーチャー」に依頼した方が安くて速いということも十分にありうる状況で、利用料金の高さと検索条件設定のノウハウ獲得の難しさが利用の一般化を阻害している。

トランザクションには、PDS (Public Domain Software)、ショッピングなどがある。

PDSは、広義には、ホスト・コンピュータから各利用者のパソコン等に転送して自由に使うてよいというプログラムやその他のソフトウェアのことである。狭義のPDSは著作権を放棄した(あるいはそれに準ずる)ものものを指し、広義のPDSには、フリーウェア(著作権を主張するが狭義のPDS同様、自由な利用を認めたもの)、シェアウェア(著作権を主張し、利用価値を認めた場合に対価を求めているもの)の二つも含まれている。

ショッピングは通信販売をネットワーク上で

実現したものである。デパート、大手書店での商品購入、切符の予約等種々の商品やサービスに適用されてきている。

③ 空間的スケールいろいろ

ホスト局に接続するためには、前述したように電話回線を使用しなければならない。したがって、遠隔地のホスト局に直接電話して利用すると、遠距離通話料を覚悟しなければならない。この問題を解決してくれるのがVAN (Value Added Network) である。

利用者は自分の家から最寄りのVANのアクセス・ポイント（接続点）に電話する。最寄りのアクセス・ポイントからホスト局まではVANが接続する。VANに支払うべき料金は、日本国内同士の場合距離に左右されないから、電話料金よりも遠距離になればなるほど安くなることになる。大手の商用ネットワークの場合、自前のVANを持っている場合も多く、その場合のVAN料金は不要になる。

こうしたVANに加入しているホスト局の場合、ホスト局と利用者の距離的な隔たりは小さなものとなる。したがって、会員の所在地も日本全国あまねく広がっている。一方こうしたVANに接続していないホスト局の場合、会員はホスト局の所在地周辺に限られてしまう。草の

根ネットワークにもVAN接続されたものはあるが、多くはこうしたVAN接続のないネットワークである。

④ 話題いろいろ

話題は非常に豊富であり、それぞれに応じた電子会議やSIGが設定されている。大規模ネットワークではビジネスの種類、趣味の種類、コンピュータの種類、料理の種類、地域の問題といった種々の数をすべて足したぐらい電子会議やSIGが作られているといっても言い過ぎではあるまい。

実際、商用ネットワークでは百をはるかに越えるSIGが作られている。利用者数が多ければ多いほどメッセージも増え、メッセージが多くなればなるほど話題に応じてSIG分化させるといふ因果関係があるように見受けられる。またその逆に、多数設定することにより利用者を増やそうという意図も窺える。

草の根ネットワークでは、個性をアピールするように電子会議やSIGが構成されており、多くても数十程度である。

三——メリットと問題点

ネットワークに接続し、電子会議やSIGに

参加したり、電子メールを使ったり、「ネットワーキング」を進めていくと、まずメリットに気付き、次に問題点にも気付くことになる。そこで、以下、メリットと技術的・人的な問題について概説する。

① メリット

電子情報ネットワークのメリットは次に述べる五点であろう。

第一に、社会の情報化のなかで、主体的かつ積極的に自ら獲得し創造できる場であることがある。

第二に有効な時間利用が図れることである。参加者全員が同時に接続する必要はなく、参加者各人の都合のよい時間に接続すればよいからである。

第三に、年齢、性別、職業、専門が異なったいろいろな人と知り合えることである。

第四に、空間的距離と関係なくコミュニケーションできることである。

第五に、人間という最もあいまい検索の可能なデータベースを利用できる。

メリットの典型例の紹介として、筆者の経験したことを述べてみよう。

かつて、「大学の教育用コンピュータのデータ破壊の事例」について調べる必要があった。

その必要が生じたのはそういった事例があつてかなりの時間が経過してからであつた。したがつて、まず行つたことはこの事例に関心の深い人に電話で聞くことだつた。しかし、その人は該当する事例があつたことを記憶していたが、いつ頃の話だつたかまでは記憶していなかつた。

そこで、ネットワークのデータベース・サービスを利用して検索することにした。しかし、検索条件の指定を変えて何度も試してみたが、検索には成功しなかつた。残つた方法は電子会議で質問してみることにだつた。「誰かご存じありませんか?」と書き込んでみた。次の日改めて接続してみると、反応があつた。「私はその事例を取材したことがあります」という趣旨のもので、何年何月頃のことだつたか、当事者のコメントはどうだつたかも教えてくれた。これを書き込んでくれたのはパソコン雑誌の編集者であつた。そして新聞の縮刷版を一カ月分だけ見返すことで求めていた事例は発見できた。もう一度データベース・サービスを利用して、なぜ検索できなかったかを確かめてみると、その事例がデータベース・サービスで検索できる範囲の年月よりも古い記事であつたことがわかつた。後日、ネットワーク参加者の会合で、初めてその編集者と直にお会いしたとき、丁寧にお礼申し上げたの言うまでもないが、彼がどこに住

んでいるのかまでは聞き忘れてしまつた。このように非常にうまくいったのは出版社の運営するネットワークで質問したためかもしれないが、ネットワークのメリットを全て語ってくれる良い例ではないだろうか。

② 技術的な問題

【最初のハードル】

ネットワークに接続し、各種のサービスを利用しようとする、まず最初に煩雑な命令やメニューに戸惑うことになる。各種のサービスを受けるにはそれに応じたメニューを入力したり、メニュー選択の繰り返しをしなければならぬ。ネットワークに接続したものの、使いたいサービスがどうすれば使えるのかよく分からず、心の中で電話料金のメーターが「カチャッ、カチャッ」と上がっていくような焦りを最初はだれしも味わうのである。

次に、普段接続しているネットワークとは別のネットワークに接続すると、今度はネットワークごとと違う命令やメニューの体系に戸惑うことになる。

このような状況は利用者の一般化を図る上でマイナス要因である。ホスト局同士の操作統一は困難かも知れないが、通信ソフト側の操作の単純化・共通化を可能にしている例もあり、今

後のさらなる進展が期待されている部分である。

【第二のハードル】

最初のハードルを越え、活発な利用を進めていくと、次に技術的な要因からくる二つの問題に直面する。

第一に、会員数の多いホスト局は話しながら多々、なかなか接続できないとか、接続できたとしても命令や入力文字に対する反応速度が遅くなるなど、利用上の問題が生じてきている。これはとくに大手商用ネットワークで顕著である。同時に多くの利用者が接続する時間帯は午後十一時台であるが、この時間帯に接続するにはかなりの忍耐を要する。

この問題はホスト局側の受け入れ回線数とホスト・コンピュータの処理能力が原因である。この問題は次に述べる第二の問題と比較すると対応は容易で、ホスト局側の対応策は講じられやすいものである。

第二に、活発な電子会議やSIGではメッセージ数が多いので、頻繁に接続する必要が生じてくる。そうしないと、また読んでいないメッセージの数が多くなると同時に、話題についていけなくなつたりする。メッセージの数が多くなるにつれて、頻繁に接続するか、長時間接続するかのとちらかの対応をとらなければならなくなる。すなわちネットワーク利用にかかる時間と

費用を増大させる。また、あふれるばかりのメッセージは斜め読みや読み飛ばしを招き、折角の情報が必要になってしまふ。利用者にとってネットワークに接続できる時間にはおのずと限度があるので、その限度を越えることになった場合は、その電子会議やSIGへの参加頻度が一気に低下してしまうようである。

この問題は要約情報の整備不足や情報検索能力の乏しさによるものである。現在の電子会議やSIGでは、要約情報を作るのは人手に頼っている。しかもその人手は議長役あるいはその補佐役であり、いわばボランティアである。したがって、要約情報を期待することはできても、要約情報不備の責任を追及することはできない。

要約情報が整備されていなくても、情報検索能力が優れていれば問題はあまり大きくならない。しかし、ホスト局のコンピュータの情報検索能力は乏しいのが現状であり、これはひとえにホスト・コンピュータの機能、すなわちコンピュータ・プログラムの仕様に起因している。データベース・サービスにおいては情報は検索しやすいように分類・整理して処理するようなコンピュータ・プログラムが組まれているが、電子会議においてはそのように組まれているのではない。

この問題に対応するのは容易ではない。コン

ピュータ・プログラムの改造が必要ならばかなりなく、データベース・サービスにおいて情報検索を容易にしている「索引情報」を電子会議に書き込まれるメッセージに要求しなければならなくなるからである。

この問題の消極的解決策は二つある。一つはその電子会議やSIGで質問することである。善意ある先輩参加者が質問に答えてくれることが多い。人という「データベース」に依存するのである。もう一つは、小グループへの分化である。ある電子会議やSIG内で活発になった話題は、その話題専用別の電子会議やSIGを新設して独立させる方法である。この方法はいわば情報の分散化であり、折角の情報集積が生かせなくなる恐れをばらんでいる。

この二つの技術的問題に進んだ利用者たちは次のように対応している。まず、パソコンの通信ソフトで自動運転の可能なものを入手する。次にそのソフトの自動運転機能で、①指定した時刻（例えば空いている早朝）に電話をかけ（もし話中ならかかるまで電話をかけつづけ）、②ネットワークに接続したら、電子メールが着いているかを確認し、③参加している電子会議やSIGの新しいメッセージを読み、④以上の過程をパソコンのフロッピーディスク等の媒体に記録し、⑤ネットワークの接続を切る。

こうしてメッセージを自動的に得た上で、パソコン側の文字編集用ソフトや情報検索用ソフトでメッセージを読んだり、必要な情報を検索する。こうした方法をとることによって、彼らが一日にネットワーク利用のためにさく時間は三十分から一時間とまりであるという。どんな人でも講じられるというレベルの解決策とは言えないようである。この点に関しても通信ソフトの改善が望まれる。

④ 人的な問題

電子情報ネットワークには、参加者自身が生み出している問題もある。ここではとくに、情報ネットワークの脆さを強調しておきたい。以下に述べるような脆さを十分心得ない参加者は電子情報ネットワークの有用性を活かすことができないし、長続きしないことになる。

電子情報ネットワークは、善意に基づいている。悪意を持った参加者のネットワークを荒廃させようとする企てには弱いのである。悪意を込めて書かれているかも知れないメッセージであっても、これを削除することは簡単ではない。「公序良俗に反するメッセージは削除する」旨の規定がされていても、果たしてこの規定に当てはまるかどうかの判断は難しい。「表現の自由」との兼ね合いも判断を困難にしている。

ネットワークに初めてメッセージを書き込んだ後に陥りやすいのが「燃え尽き症候群」である。電子会議やSIGに初めてのメッセージを書き込み、それに対してレスポンスが「あるかなあ？」と期待し、「あった!」ときの胸の高まりを筆者は忘れることができない。他の多くの参加者も同様であるという。

その感激のあまり、しばらくは毎日のようにメッセージを書き込む参加者も少なくない。ネットワークに完全のめり込んでしまうのである。そして、ある程度の時間が経つと冷静さが戻り、メッセージの数も減少してくる。

問題はその後である。最初炎があがるが、その後の火力に価値がある「炭火」のようなネットワーク利用となることが望ましい。しかし、最初にパッと炎がでるが、それっきりという「紙きれ」のような燃え方の参加者も存在するのである。「紙きれのように燃える」のではなく、「炭火のように燃える」ことを念頭においてネットワークとつき合うことが重要であろう。ネットワークは「マイナス三情の世界」であるという。①顔が見えない、②声が聞こえない、③筆の勢いがわからない、これら三つの「情(じょう)」が、文章として書かれたメッセージには欠けているというのである。顔が見えないから、ついダイレクトにメッセージの問題点を指摘して、メッセージの筆者を傷つけることもある。悪意なき指摘が揚げ足取りと勘違いされ、揚げ足取りの応酬に陥る最悪のケースもある。こうした誤解を防ぐためには「反論はすぐ書かないで、一夜干し」することが必要である。ネットワークでの活動を続けていると、「オフライン・パーティー」という会合に出会う。電話回線と切れたところでのパーティーという意味からこう名付けられている。初めて参加する者にとっては「マイナス三情」を補う会合であり、既に参加した者にとっては「旧知を温める」会合である。メッセージを読むにつけ抱く「このようなメッセージを書いているのはどんな人なんだろうか?」という気持ちを満たしてくれる会合である。参加者の顔もわかるし、声もわかる。勝気な人なのか内気な人なのかわかる。「百文は一見にしかず」なのである。

こうした有益な情報をもたらすオフライン・パーティーも人的問題をもたらす一要因になり得るのである。会合で深めた他の参加者との仲をそのままネットワークへのメッセージに持ち込むことによって、その電子会議やSIGは「新たな参加者を拒む」状況になってしまう。会合に参加した者でないとかからないメッセージが氾濫することによって、閉じた社会となるのである。このような状況は参加メンバー構成

を指摘して、メッセージの筆者を傷つけることもある。悪意なき指摘が揚げ足取りと勘違いされ、揚げ足取りの応酬に陥る最悪のケースもある。こうした誤解を防ぐためには「反論はすぐ書かないで、一夜干し」することが必要である。ネットワークでの活動を続けていると、「オフライン・パーティー」という会合に出会う。電話回線と切れたところでのパーティーという意味からこう名付けられている。初めて参加する者にとっては「マイナス三情」を補う会合であり、既に参加した者にとっては「旧知を温める」会合である。メッセージを読むにつけ抱く「このようなメッセージを書いているのはどんな人なんだろうか?」という気持ちを満たしてくれる会合である。参加者の顔もわかるし、声もわかる。勝気な人なのか内気な人なのかわかる。「百文は一見にしかず」なのである。

ここでは、具体的なネットワークを例に、市民の取り組みの事例を紹介する。

例として取り上げるネットワークは、「ワンダーランド・かながわ」である。このネットワークを取り上げたのは、①横浜にホスト局をおいていること、②まちづくりに関する話題に特徴を持たせていること、③偶然筆者が加入していること、の三つの理由である。

の硬直化をもたらし、ネットワークの発展を阻害するものである。

この潜在的な問題を顕在化させないためには、古くから参加しているものと新たに参加しようとするもの間のギャップを埋めるような場や、そのことの必要を心得てメッセージを書き込んでくれるメンバーの存在が必須条件となる。ネットワークに長く参加していて寂しいのは、加入しているネットワークから誰かが退会しても、あまり誰もそのことに気が付かないことである。一年ぶりにミーティングのお知らせを電子メールで送ったときに、初めて「そのようなIDの会員は居ない」ことを知らされるのである。ネットワークの脆さの一端を示しているといつてよいだろう。

四——市民の取り組みの事例

ここでは、具体的なネットワークを例に、市民の取り組みの事例を紹介する。

例として取り上げるネットワークは、「ワンダーランド・かながわ」である。このネットワークを取り上げたのは、①横浜にホスト局をおいていること、②まちづくりに関する話題に特徴を持たせていること、③偶然筆者が加入していること、の三つの理由である。

「ワンダーランド・かながわ」は同時に四人まで接続でき、電子メール、電子掲示板、電子会議、チャット、プロフィールといったひとつおりの機能は備えたホスト局である。加入者数は約三百人である。

電子掲示板「耳寄りな話」の一覧を次に掲げる。

- 1 ログイン・メッセージ
 - 2 ワンダーランド・かながわのご案内
 - 3 アリスセンターからのお知らせ
 - 9 みんなの掲示板
 - 10 イベント集会情報
 - 11 売ります買いますバザー
 - 12 ワンダーファイルムライブラリー
- 七種類の電子掲示板に分けられている。掲示板の番号が飛んでいるのは、将来空いている部分に新しい掲示板をもうけることを想定しているためである。最も掲示メッセージ数が多いのは「イベント集会情報」である。
- 次に電子会議「会議場」の会議一覧を示す。
- 1 ワンダーティーパーティー
 - 2 登場人物は語る
 - 3 書き込み道場
 - 4 子育て大変記
 - 5 ワンダーランド・かながわ総会
 - 6 総会傍聴席

- 10 ワーコレオンラインシンポジウム
- 12 ワンダーランドのアリスセンター
- 21 各議会ダイジェスト
- 30 まちづくり言いたい放題
- 31 まちづくりとイベント*夢に翼を*
- 32 地域と国際化*まちをひらく*
- 33 地域とふるさと創生*まちの知恵*
- 34 水とまちづくり*水際に立つ暮らし*
- 35 まちづくりとネットワーク*夢を結ぶ*
- 40 他自治体の事例報告コーナー
- 50 R・D・A・N情報
- 51 どこでも放射線
- 53 ワイワイ/マレーシア旅行
- 55 職員おしゃべりスペース
- 60 電脳の密かな愉しみ
- 61 悪魔の呪文
- 66 それゆけ動網人
- 67 動網人手帳
- 70 よこはま自然郷
- 75 健康徒然草
- 77 ちえしや猫音楽館
- 81 せっけん会議
- 85 がんばれ白菜
- 90 これでもいいのか、日本
- 91 私の生命観
- 92 私の異性観

- 93 見た、観た、読んだ
 - 94 私の労働観
 - 99 K&Zプロジェクト
 - 101 88アジア市民フォーラムinかながわ
 - 103 グリーンピースの南極探検
 - 104 第20回全国ボランティア研究集会
 - 105 かながわ市民連合創世紀
 - 166 それゆけ動網人の軌跡1
 - 199 会議内容紹介
 - 200 各会議のみどころ
- 全部で四十二の電子会議が作られている。現在書き込み可能な会議で書き込みが活発なものベスト三は、「それゆけ動網人」、「電脳の密かな愉しみ」、「子育て大変記」である。
- 「それゆけ動網人」は携帯ワープロ・パソコンを持って、普段の場所以外から接続しようとする活動を主題にしている。新幹線や街頭の公衆電話からの接続にも成功している。こういった利用はネットワーク利用の可能性を日常活動の場に広げるものとして参加者を熱中させている。
- 「電脳の密かな愉しみ」はコンピュータに関する全般的な話題を取り上げている。ソフトウェアの利用に関する話題ばかりではなく、参加者の中にハードウェアに強い人がいるので、「ハードディスク自作講座」といったかなり専門的な

話題もある。

「子育て大変記」は名前の通り育児一般に関する話題が中心である。参加者の子ども誕生を祝うメッセージもある。「現在流行っている風邪の特徴は胃腸にダメージを与える点である」といったタイムリーな話題もある。「紙おむつと布おむつ、どちらにしようか?」というような問いかけに対する「うちの場合…」と返答がある。新米パパ・新米ママの質問に先輩お母さんの参加者が答えるような話題の進展が見られ、核家族化の進んだ現代社会において、とくに共働き家庭で見られるような地縁との結びつきの弱さを補強する手段として役立っている。

さて、「ワンダーランド・かながわ」を特徴づけている「まちづくり」に関する会議を最後に紹介しておこう。三十番から三十五番の一連の会議がまちづくりを主題としている。最初に三十番の「まちづくり言いたい放題」が作られて以来、番号順に新しく会議が新設されてきている。三十番の会議が中心で新たに独立させた方がよいテーマがあれば会議を新設するという方法をとっている。

現在もメッセージが増え続けているのは三十番と三十四番の会議である。最近の話題としては三十四番会議でゴルフ場の農業問題が取り上

げられている。

これらの会議の参加者には県庁や市役所の職員もおり、各所属の自主研究グループとも連携しながら活動を行っている。さらに、「TheまちづくりView」という雑誌(第一法規出版)に、これらの会議に書き込まれたメッセージをもとにした「まちづくりHOTネット」という連載を行っており、メディア・ミックスにも挑戦している。

五——まとめ

いささか問題点と課題を強調してしまったようである。しかしながら、問題点を差し引いても、市民にとって電子情報ネットワークの有用性が高いことは何ら疑いはない。

アメリカでは操作の簡単化をGUI (Graphic User Interface) で実現し、今や「結局は中身の問題である」という基本的な点に関心は移っていると聞く。日本においても商用ネットワークや通信ソフトの対応によって、技術的問題が解決されることを期待したい。

草の値ネットワークの活気は今後も持続していくものと思われる。なぜなら、草の根ネットワークは、技術的な問題とは比較的無縁であり

ながら、電子情報ネットワークのメリットには変わりがないからである。

△東京都立科学技術大学

一般教育人文系 専任講師▽

(註)

(1) モデムや音響カプラはデジタル信号と音響信号を相互に変換する役割を持っている。コンピュータはデジタル信号を取り扱い、現在普及している電話回線は音響信号を取り扱うためこのような変換器が必要となる。

(2) トランザクション (transaction) の一般的な意味のひとつに「取り引き」がある。電子情報ネットワークにおいてもこの意で用いている。広義のPDSには金銭を伴わないものも含まれるが、シェアウェアのような対価を求めるものもある。また、本稿ではトランザクションに含めている。また、データベースは利用料金のかかるものであるが、その検索機能に着目して、インフォメーションに含めている。

(3) 東京都立科学技術大学工学部教授で、電子情報ネットワークに関して造詣の深い八戸信昭先生の言葉である。